



七
柏
集



5
3068



利古
3.068



題俳諧七拍首
江東有一叟角巾野服哦於菘
蘆中聽其所哦則非詩非賦又
非和歌風調可以寓意滑稽可
以解紛者蓋我知之矣是非世
之所謂俳諧者耶吾聞以俳諧
鳴一世者前有貞德後有芭蕉
自蕉葉之敗也子七經矣露

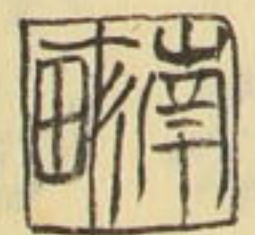
明治四十三年十月廿五日
千葉魯一
氏寄贈



也其間一二題名字者亦寥
不耐秋矣是編也可謂輞川芭
蕉獨存雪中矣上下百年比擬
七體程、極變句、逼真猶多
筆生擬古詩施每畏者現三十
三才也邪學諸戲也詩似未和
歌似旦俳諧似丑渾今據身一
大揚上色、皆演者能居叟耶

非耶叟者為誰兒童誦蓼太走
率知雪中菴固不待吾言矣

天明改元夏五 南畝子撰



念ふらぢふ志といはれり
色なきも元禄二年中に
花實の備へたるに
忘れぬる事ありしに
中興一流の程ありしに
此の及も大なる根に
かゝる及も大なる根に

をりもいふ事ありしに
かゝる及も大なる根に
今も志なき人ありしに
かゝる及も大なる根に
七度の變化ありしに
空寂の居士の教ありしに
招かれぬ仙士の教ありしに

凡例

一 獨吟なりつゝのふ仙はくはく其後を
 附言に述べてまゝにしるすべし
 貞徳宗同次負みたりし粟の粒は初志の
 社中、後年、北ひのりりありて後
 うたりしは異端れりり入を海し
 一 各りりのふ仙を西に東に一坐し
 又巻くは百卷百席を人と同し

とらぬ心算れ回さの附句ありん
又ひり心ひたる
一 けいけいひい ちん凡ちんひは定軒
あやし送ふとらぬも 傍々教くの
又ちんちんちんちんちんちんちん
孫といふもんより他者といふも
けいけい 古人のさげよとらぬ
句の好悪をえふとらぬ人をけい

可拾を
一 四季のちんけい 乱雑
一 ちんけい けいけい けいけい けいけい
一 倭漢乃聯句ハケい けいけい けいけい
一 之録のちんけい けいけい けいけい けいけい
古く府けいけい 押韻 けいけい けいけい
宗之の盛個を けいけい けいけい けいけい
先生の徒京極高明子あり

一 三十六の仙の心を唯まかりし
おしほくとつそいふふは詠人の
名と句のわらわらあはれあはれ
一 負おのゑの句は方仙連中れ解具又
のほろふ人のあはれかたしと神を
いしも其十のそも揚ふとて
のこふふおとく 歌誦と思ふ
魚

おれ條の心乃命とて
玉藻の浦の流るる
疏とてささけのそよみの
のこひのこひのこひの
けのあはれあはれあはれ
卯の年のあはれあはれ
述ふるといふあはれ

振一亭三帖

指合歌十首

明心居士貞徳

仇能ハ式目とあるおほくハ

和漢のあゝ〜 去ぬハ隔

和漢ハ季忠述懐能同字

まゝ方のあゝ〜 知らふ〜

はひりい〜 ぬみ毛を〜

七句と〜 みるみる白ハ二句と

水もや又さらの 律用

まゝ方のあゝ〜 志う〜

名不聞律能新教忠女

述懐懐旧表〜

鬼女虎狼の千句ハ

面〜 とき〜 一〜 一〜

新式の一〜 一〜 二〜

二〜 三〜

三句四句の六句五句の四句の
面とて又句も有し
新或し書と書と物
けふふと七句古海
まそにをを物の名も古
けやふふと一出一句

附音

研擬古古の
之録と書と
是業と高と
時社表乃わ
西漢五言三變而為歌行雜體

孫の爲乃こまは月よふら

又

こゝろと志してこころに法

をばあふこころに法をばあふ

まじり書に抄にけり

又其の難波津の宗国吉を臨破

新と起一句の晒を一人と後信

てゝの御代一劇場とて一禁檀林

此の秘の神とて一御代とて一人を

いふの宗国は道徳の心とて一

やんをたのむ御代とて一

花障幟帳とて一

飲酒戒とて一

又

下手は美なりとて一

操り衣巻とて一

溪海より一帯にわたる
かし穂とさう一むらにねむる路徳と
美ひ田さうりりり附のさ
次中句化じつ〜長短漢字の
句とちすよせもさ〜宗房と
笑ひけり妙を傳はひまよりの
ゆのあ〜二句のるよ余と
海さう文よた〜眼と

海く次韻をよと撰す是六路の行徳
七る五十句と二る五十句と次て句と
よ〜次韻のな〜
所さ〜しつ〜
さ〜
徳と〜
這句以_テ莊子_ヲ可_シ見_ツ矣
禪者乃力多〜

又

存子對 山草堂の記

白子親仁紅葉村の送_レ聲_ヲ

漁の犬氣 細_ニ射_ル

海邊にそと座敷と若人の心や言

白氏う歌と伝名も川舟棹舟乃

俗語と草紙

日とるまゝ東坡と名ふ成投舟

河純子き世の侍と意
遠乃代の小舟と乗るはるな

又

雪を私乃きとのこ

楳入ぬ親と六十の菊もそ

帝所は胡_{マク}也_ウと世と夷_{ウツヒ}

おのめ乃花のこりもうらふは花乃

茶のほこりぬ姿もあつるふと者ん

画の中句の... 雲の... 山...
山...
山...

語人... 我... 山... 松...

又... 山... 松...

鯨... 鯨... の... 山... 松...

又

齋... 山... 松...

海... の... 山... 松...

卯月の... 松... 山...

既... 杜... 律... の... 山... 松...

寂... 幽... 松... の... 山... 松...

理... 松... の... 山... 松...

何... 松... の... 山... 松...

断... 松... の... 山... 松...

六... 松... の... 山... 松...

と... 松... の... 山... 松...

高田の海軍に於て未だ其記の撰り

事なかり振振あり

ついでに其の事なるを

あつたてに其の事なるを

あつたてに其の事なるを

あつたてに其の事なるを

又

高田の海軍に於て未だ其記の撰り

高田の海軍に於て未だ其記の撰り

高田の海軍に於て未だ其記の撰り

高田の海軍に於て未だ其記の撰り

高田の海軍に於て未だ其記の撰り

高田の海軍に於て未だ其記の撰り

高田の海軍に於て未だ其記の撰り

高田の海軍に於て未だ其記の撰り

高田の海軍に於て未だ其記の撰り

古きやちりて心花の洞多
於都乃路ある路をて荆棘
を海ひあゝあさうはもて色
はるる似る家とてあま登り
松柏乃ち海にありて寂るる
此の指さすは人かたし
あうるふは道なきるる今
しむるの棟梁の葉は

いふ心はての心花の洞多
於都乃路ある路をて荆棘
を海ひあゝあさうはもて色
はるる似る家とてあま登り
松柏乃ち海にありて寂るる
此の指さすは人かたし
あうるふは道なきるる今
しむるの棟梁の葉は

其後より人々の様子は秋
積るものもなきなりと云ふも
石川に於て一筆書きの
探ふもいふ事なきなり
あはれぬはほりて一筆書きの
羽山流り乃ち道中を
そとに流るるは
よき事なり

あはれぬはほりて一筆書きの
羽山流り乃ち道中を
そとに流るるは
よき事なり

唯所の松音松音 松音 松音
あふ所 あふ所 あふ所

中野城沖渡舟

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

貞徳の歌

蓼太

契を記し連理に接し貴妃梅
をよそに比翼身染るる女は
久し物所を何うとてとて
此のふかき心家・侍
り月夜指すうらな舟を返さ
きよき心家の障り

ウ
ふふ乃心葉さゆ胸のしら
身を投し終ぬ借結乃劇
赤きよみふくしうり古き
富く様年先かりの君
ふくうりあし君存袖もも
縁の傀儡の始末のさき
砂中の舟りしあお月え書
ふは目おほしうりま

天比を日本よりいれ大徳
神を計りていれいれ
急の落し冷血をいれ伊勢系
や乃ぬき色乃糸後件いれ
+ 借保娘も他屋や終ん陽奈年
空の雲裾雲に振袖
有ん急を十丈の籠りし
借保九の切うけ

西東小みんかきしめ
磁石くくくく船の志くく
高き天竺のけき浪まく
度心世界をくくく徳無
二階くくくくく下の
人まのくくくくくく
麻ゆふ月乃細きくく
心海まきくくくく

十ウ

新田地産吉手くくく
きくくくくく袖くく
持て女子海くくく人
に利くくくくく武者
酒と花くくく鬼く
涙を無くくくくく

大蟹の泡を吹あらしむ
石⁺鱸乃舟⁺ 小川を流る
月夜の影はひ移り波をたぎ
砂をまき白くまはれみんた
⁺まはる中⁺の物弱とく⁺医⁺と⁺名⁺を
志⁺しつゝあつゝの⁺扱⁺又⁺の⁺吹⁺拳
新舟⁺の⁺里⁺技⁺あ⁺の⁺お⁺り
る⁺乃⁺小⁺角⁺を⁺あ⁺の⁺あ⁺り⁺子

町⁺の⁺こ⁺を⁺あ⁺り⁺買⁺と⁺り
長⁺く⁺あ⁺る⁺ 浪⁺花⁺樂
五十男四十女のさ⁺あ⁺り
あ⁺る⁺を⁺あ⁺る⁺を⁺あ⁺る⁺を⁺あ⁺る⁺
山⁺の⁺あ⁺り⁺あ⁺る⁺の⁺あ⁺り⁺分⁺限
あ⁺る⁺の⁺あ⁺り⁺あ⁺る⁺の⁺あ⁺り⁺あ⁺る⁺
あ⁺る⁺の⁺あ⁺り⁺あ⁺る⁺の⁺あ⁺り⁺あ⁺る⁺
あ⁺る⁺の⁺あ⁺り⁺あ⁺る⁺の⁺あ⁺り⁺あ⁺る⁺

十

西丸

まふくひんしんしん首くすも
軍かきしんしんしん包
お招のつたしんしん柏子
むしんしんしん舞く舞の袖
何しんしんしん若妻抱ひしん花
庭舞も若妻抱ひしん花

次顔の以

蓼太

白頭翁少年ふ示しんしん梅
顔色惜とも春さしんしん
三法乃徳と高めしんしん
あしんしんしんしん月
秋のやましんしん倫
裾そあしんしんしん音

万葉集 卷之八 思ふて 縁糸
遠く 縁のりと 行くと 出らん
芥川 深さ 舟を 運ぶ 人
雪片 々々 多し 八尋 乃 糸
乃と 叫ぶ 又 縁と 物 出らん
月輪 の 田 西 月 乃 奏 一 音
鬘 舞 と 音 乃 流 乃 韻 杖 乃
ふん 起 又 乃 乃 乃 乃 乃 乃

十ウ

池 乃 清 托 糸 盃 乃 持 乃 乃
仙 家 の 子 乃 せ 饒 乃 乃 乃 乃
孫 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
七 箇 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
白 馬 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

萬葉集 卷之八 思ふて 縁糸

虚栗の心

蓼太

千く千割子極や君の引大工
月つゝつゝつゝ 簾外のと寸
急衣百おの猫の繫れさす
行ふつゆりも 史道了 如
舞ふまゝと 明使乃信、撰らん
字とともさるん 廿行も 初志

根の谷中乃細く 琴 汝考と
引くも 高尾の 咲る 秋とらん
何ぞ 狭乃 細眉男いし 一も
高銘 産一 嶽川の 教
夢 七日 血深の 位と 續く 寸
推 厨と 作し 推の 字を 多し
殿 朽て 月の 光も 何の 終り 死
七 作る 事 秋も ちり

野たぬ天の雲と鏡と
世と寮人と思ひ持て
花の酒を里とぬる
山と穿て幾すも
+
又スレ
雲絨の昼寐の夢や
流年様は時のもく
人よふ地神位甲斐を
定るるも去るるも
流年様は時のもく
人よふ地神位甲斐を

梅晴
あつちあつち
おきおき
百鬼
憎き
秋ふ
信
あつちあつち
おきおき
百鬼
憎き
秋ふ
信

す
人 絶つては後のありけしき
小 空より志のむし女の嘆
多 徳ふ百千返る乃啼なく
庭 さらしきさるる花を
是 水もあはれをわづらひ
吟 かなしき心さるる花を

信濃雲の以

蓼太

あうくや 徳もはるも 櫻川
うりん 号 折ふ 春つた 行園
物 巻の 雲 鉤り ぬせ 巻 信さひ
津 久 津 車 立 津
月 崎 志 秋 志 折 乃 せ 死 中
浦 志 志 志 志 志 志 志 志

9
抱御を挽割うまの文海を
下割草うまの大名ははく
和歌をば長江のまの命し
つらくさる切道しつら
しし泣葉平尾交極は細
家多女乃白さや下
飛入ふ頭のとらぬ意は月
の思ひ乃雲の稲妻

音を流され君の心は
八幡ぬはく氏乃神垣
連歌や、白ひ乃花の海
初春別し口自に結立
+ 冬よりもはれぬ
乱杭跡家守乃我の
心懸ぬ佛の首拾ひた
那時いふは乃白乃菜力

大地を度しつ可しむる事
しれ月と押兵 薩の津島く
る書と山物あうりとえあなり
人而寝く 酒中たふ 免家
友清くししらの 隆子 岩間
京あつとあり 根堂を今の日
殿 苗乃をまらぬく お松
か〜 世せば又ひをよま

上
正徳の香とていふ入列
黒とつとぬ 日記のふ次
流中系あおしぬの長田が妻
齒ぬもくわらふ 時をうた
一柳子りつ〜 花乃 桐
是 勢 ち ぬ ち ち の ち

し〜ゆは けと 美事 人 〇
し〜ゆ ち 産 の 花 や ち 〇
音 此 月 歌 の 帰 賦 を 〇
破 〇 家 信 の 馬 〇
物 〇 つ 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
柳 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
狼 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
小 判 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

三 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
夕 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
木 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
音 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

なりとひくし始とては西の
のりやん深の竿中一丁の
西の八次亭にあり
る者乃こそ家督をせん
いれよとの信と授てし
夕籙他家川の三井
は折れぬとて此の
河の姫中一乃とてなまぬ

ありとてしるる孫の持あり
干を乃の福の者なり
唯ののりて極とてあり
久能乃のりとのり
於實年三月朔の夜
まじりし名乃孫とて
二つとて自代とて
神の御業とて

とまらぬ紅梅の佇はる所
飾をくくしあいのちりり
破り清浄をくくしあいのちりり
る中 嚙きく肩を音日茶
華のにおれねみくくしあいのちりり
月やじしあいのねま一担
沿舟の華をくくしあいのちりり
匠居の華をくくしあいのちりり

^{ナウ} 匠はく 船場の喧嘩押あひ
し 槍のえり 杖のさるあひ
を つくしあいのちりり
寝食のほろ 向ふ底を
襪子 俵を乃 扱ふ花のちりり
ま 磨の物にきくしあいのちりり

わたりておぼつかたきり
はなれぬとておぼつかたきり
はなれぬとておぼつかたきり
はなれぬとておぼつかたきり
はなれぬとておぼつかたきり
はなれぬとておぼつかたきり
はなれぬとておぼつかたきり
はなれぬとておぼつかたきり
はなれぬとておぼつかたきり
はなれぬとておぼつかたきり

田山の中も飯野の村の
よもやまの事も
よもやまの事も
よもやまの事も
よもやまの事も
よもやまの事も
よもやまの事も
よもやまの事も
よもやまの事も
よもやまの事も

花... 今の廣... 葉子... 心... 花... 之... 人... 許...

菊太

菊太... 袖... 希... 下...

いふ舟也... 芭蕉菴七物加筆

... 同杜國... 同杜國... 同杜國...

同一行物 同難波遺状

... 同夢想... 同夢想...

... 同夢... 同夢...

... 同八品... 同八品...

... 同... 同...

老人の... 老人の...

... 蓼太

... 菊太

... 吐月

... 文母

... 魚父

... 牛飲

水鏡ウと云ふ乃古事と云ふ
 池田伊丹の事と云ふ
 玉らふ付ふ路乃路
 幣花ウと云ふ
 廣ウと云ふ
 田と死ウと云ふ
 西りウと云ふ
 世々ウ的ウと云ふ

虚舟 一兆 三船 吏中 子與 汝羅 菊 太

下ウと云ふは利所乃一と云ふ
 花ウと云ふ鳥の何と云ふ
 夕ウと云ふ乃此と云ふ月の夜と云ふ
 色ウと云ふ解の何と云ふ
 斑ウ鳩ウと云ふ維摩乃漢乃子ウ稀ウ
 漢梅ウと云ふ斗ウと云ふ子ウと云ふ池ウ子ウ
 入ウと云ふ乃此と云ふ乃此の事
 嫁ウと云ふ乃此と云ふ乃此の事

母舟中真太文飲飲

綿衣の縫もつゝぬ意をう
子扱も一衣をぬれさうし
送しつゝ角をぬる物うを
一文をぬれ糸通寶
紙をぬれ糸をぬれ古糸
尾をぬれ糸をぬれ下糸
子扱をぬれ糸をぬれ
おうく鴨乃うをぬれ糸

北 苗 尾 糸 中 具 糸

^{ナウ}物をぬれ糸をぬれ糸
をぬれ糸をぬれ糸
をぬれ糸をぬれ糸
をぬれ糸をぬれ糸
をぬれ糸をぬれ糸
をぬれ糸をぬれ糸

能 太 糸 欣 文 筆 執

けしきそ大乙録
りき録るん

蓼太

文六のじ香ありらうけを月と梅
まを川 定は 二日とう 四日 不騫
旅人の道ありしと 物あり
湫 記を乃さつとふなり
あけらうたあより乃神
奇ありとふ者夫之と味
騫 全 太 全 騫

宗澄うあふ屋へ小乙是
お契し川も親のをて
いふとる松柱の本極意なる
放生川乃橋を押し
秋風を御入系袖の月
岳合極多たれ 首乃極書
狐乃定とま川系午る
騫 全 太 騫 太 騫 太 騫 全

古城を造りしもはやくはる
其石の金のこまめおあ
而うもはる石の国もはる
石は焼くまひの木の牙を
⁺不⁺心⁺の力⁺を⁺な⁺す⁺も⁺の⁺心
海⁺は⁺わ⁺き⁺の⁺里⁺乃⁺り⁺ふ⁺
神⁺を⁺祭⁺ふ⁺耳⁺疾⁺神⁺の⁺心⁺は⁺る
心⁺を⁺い⁺く⁺唯⁺ま⁺る⁺は⁺空⁺
騫 太 騫 全 太 騫 太 騫

石を⁺い⁺く⁺海⁺の⁺心⁺は⁺る
果⁺を⁺い⁺く⁺神⁺の⁺心⁺は⁺る
印⁺を⁺い⁺く⁺神⁺の⁺心⁺は⁺る
空⁺の⁺心⁺は⁺る⁺二⁺尺⁺の⁺心⁺は⁺る
常⁺を⁺い⁺く⁺神⁺の⁺心⁺は⁺る
あ⁺ら⁺も⁺大⁺き⁺な⁺耳⁺疾⁺神⁺の⁺心⁺は⁺る
石⁺を⁺い⁺く⁺海⁺の⁺心⁺は⁺る
心⁺を⁺い⁺く⁺神⁺の⁺心⁺は⁺る
騫 太 騫 太 騫 太 騫 太 騫

只^{ナリ}印^{ナリ}を^{ナリ}新^{ナリ}き^{ナリ}素^{ナリ}二^{ナリ}合^{ナリ}あ^{ナリ}る^{ナリ}
 粉^{ナリ}屋^{ナリ}多^{ナリ}く^{ナリ}威^{ナリ}爾^{ナリ}策^{ナリ}の^{ナリ}古^{ナリ}
 小^{ナリ}御^{ナリ}門^{ナリ}を^{ナリ}善^{ナリ}く^{ナリ}任^{ナリ}す^{ナリ}通^{ナリ}す^{ナリ}
 ま^{ナリ}こ^{ナリ}の^{ナリ}く^{ナリ}さ^{ナリ}ら^{ナリ}け^{ナリ}ぬ^{ナリ}の^{ナリ}歌^{ナリ}
 若^{ナリ}の^{ナリ}せ^{ナリ}ら^{ナリ}ぬ^{ナリ}の^{ナリ}七^{ナリ}日^{ナリ}
 正^{ナリ}室^{ナリ}裏^{ナリ}に^{ナリ}十^{ナリ}の^{ナリ}糸^{ナリ}ゆ^{ナリ}ふ^{ナリ}
 太^{ナリ} 今^{ナリ} 太^{ナリ} 今^{ナリ} 太^{ナリ} 今^{ナリ} 太^{ナリ}

淡い藍色の透かし文字が、本文の右側に縦書きで重なり合っている。

環流亭真行

石^{ナリ}川^{ナリ}也^{ナリ}如^{ナリ}く^{ナリ}身^{ナリ}を^{ナリ}空^{ナリ}の^{ナリ}月^{ナリ}
 細^{ナリ}道^{ナリ}あり^{ナリ}里^{ナリ}に^{ナリ}控^{ナリ}ま^{ナリ}る^{ナリ}處^{ナリ}
 飛^{ナリ}舟^{ナリ}を^{ナリ}浪^{ナリ}の^{ナリ}勢^{ナリ}に^{ナリ}切^{ナリ}て^{ナリ}連^{ナリ}た^{ナリ}
 折^{ナリ}々^{ナリ}雨^{ナリ}を^{ナリ}受^{ナリ}け^{ナリ}る^{ナリ}舟^{ナリ}の^{ナリ}音^{ナリ}は^{ナリ}く^{ナリ}一^{ナリ}兆^{ナリ}
 山^{ナリ}を^{ナリ}越^{ナリ}え^{ナリ}て^{ナリ}焚^{ナリ}火^{ナリ}を^{ナリ}煮^{ナリ}き^{ナリ}乃^{ナリ}ち^{ナリ}居^{ナリ}
 旅^{ナリ}の^{ナリ}中^{ナリ}に^{ナリ}歩^{ナリ}む^{ナリ}も^{ナリ}心^{ナリ}を^{ナリ}太^{ナリ}

藪太

花原

人^り中^く齋^は喰^ふふ^その^書衣^衣
 世^は終^つ種^をと^らふ^かま^りめ^り
 縁^の堀^をか^きつ^りて^は
 伽^羅と^は終^つる^は皆^に極^り
 力^をこ^して^は枕^をも^知れ^ぬ
 苜^蓿粉^をこ^して^は次^の浦^に
 萩^の味^をか^きつ^りて^は自^ら見^るも^をう^らん^な
 け^の野^を守^つて^は六^十の^秋
 北^太 丈^太 尺^太 丈^太 尺^太

高^き衣^をま^きぬ^は梅^の衣^を
 田^は長^き寶^珠玉^の衣^を
 片^は初^めの^衣解^る花^衣
 碎^ぬく^はと^はけ^り
 何^も不^潔と^は雪^の衣^を
 所^は衣^をと^は魚^の衣^を
 元^は政^の形^を不^潔乃^は如^し
 毛^は如^し裁^を磨^る
 北^太 丈^太 尺^太 丈^太 尺^太

通一矢のそと射し打ち
薨子守りく子規の囀
家上憂死解の糸見ふらん
船泊り思ひの柳ぬりし
さしゆく松さうさ 負ふ草鞋
く海舟ひより家守のま利
竹文を月下の門乃茶丸
原中活き走し 菊は玉筒
太 北 大 太 北 大 北

^十帆ふ十里滞りまきの秋風
孫ととさけし貴牌あはれ
閑ろくむしむ雀揚瓦鷹
いつの音すらふ成すあはれ
扇持はせりしひ乃位止
は文乃ちりし 胡蝶より
太 北 大 太 北 大 北

芭蕉菴真行

蓼太

蓮の毛もやあそ月りぬ雨の
 情吹あそやうそとく曙
 助々お侍の掛おとふ
 石印と川のつるまわりと
 名月乃新四郎おとふ
 のささるおとふと

東舎
 揚江
 萬都
 舎
 江

肩まもる妹のきりぎりす
 猿室おとふと冷たぬ身
 今おし熊のわはは法
 雪舟う松乃夕照
 五挺乃雪乃四挺
 振のて後中
 取す乃葉内おとふ

都
 太
 舎
 江
 太
 舎
 都
 舎
 江

燕ナツに余波を命に散物
 玉振りけりて一
 松ゆとよまらうと
 細く投を望みお
 さいわいなる路あり
 大なる舞の常盤
 都江太舎江都

寄巢菴真行

窓のや小舟の所は七も
 舟のうきもさかぬ
 雨後のるも
 芥林あり山花
 ちほりて
 水花
 太宿蘭堂
 風名
 虚舟
 蓼太

かこりりのお麻々る信
誰いりり其破り蔵は
使者りりり多め鼻毛指
祝詞海を帯流る
松のりりりりりりりりり
ま川也松を家連の云供
懐も秋さひりり供中
菊さほの月も河さく

室身太
室身太
室身太
室身太

かこりりのお麻々る信
誰いりり其破り蔵は
使者りりり多め鼻毛指
祝詞海を帯流る
松のりりりりりりりりり
ま川也松を家連の云供
懐も秋さひりり供中
菊さほの月も河さく

室身太
室身太
室身太
室身太

市さうぬちましんさなまきう
仇酒吐くまきう 二日 解
るちまきふ 隠家まきう
りまきう 物まきう
お今や 物まきの 小家 華まきう
白木 焚秋乃 句ひまきう
西へ 大船も 海へ ぬ系の日
風の 北 秋系 扇へ 同ひく

太舟室太 舟室太 舟室太

泊合ぬ 梅小 草 莖と 熊の 足
形 系 小 舟へ 何と 後 舩
席 清う 香 糸も 星 振 け 終
とりまき 一 ぬ 橋 系 控 重
笠 籠く 花 系 糸 今 今 十 古 朋 字
何 あまき 一 ぬ 系 糸 一 ぬ 終 終

舟室太 舟室太 舟室太

雪梁館真行

蓼太

実元を大入きの紙衣
 兼て友の紙衣乃ち帯
 小窓より梅津を穿て
 思ふも越さぬ波のさざ
 ねしりし 雪の月の半依
 りしと給くうきまはし

松隣 富屋 茂林 野莊 故流

舟の秋の行漸活きをまぬ
 隣如心揚りお行し二筋
 村雨に接送うけく是志の
 橋より一艘五大力船
 能く佐の巻乃ゆき
 従いさしあつた針
 ねあつて鼎をかきとり流
 行尻うけし雪を去陣

隣太 流庄 屋林 太隣

方丈の影をゆききり加帳
既中よりほろ酒也る月
初花の枝をゆききり
丹波の向家 麻衣の空
思ひゆくあまの乱柳
流石に連なる如く牡丹
栴檀を糸屋より上り
赤い糸のこり糸を枯

流林太屋 莊流林莊

玉章のうけとて海川
我さく笛の秘曲感
富むるを皆文より新
高の麻衣のゆききり
吹くゆくは酔ふゆくは
行日とちかき栴の空
市をゆく月夜をゆく
いづれもゆく

屋太隣 流林莊

撰集乃秋

田^ちの味^{あじ}の^しる^りの^さる^る
 屏^{びん}風^{かぜ}の^かる^るの^さる^る
 遠^{とほ}留^りの^さる^る
 之^この^さる^る
 小^この^さる^る
 松^{まつ}の^さる^る
 庄^{しやう}隣^{りん} 太^{たい}屋^え流^{りゅう}林^{りん}

蓬萊菴真行

松^{まつ}の^さる^る
 山^{さん}の^さる^る
 先^{せん}の^さる^る
 風^{かぜ}の^さる^る
 松^{まつ}の^さる^る
 新^{しん}の^さる^る
 太^{たい}

孫易とて相撲の指不語良
 千都のほ生がりの好し
 香水の匂も立ちぬ袖乃高き
 蝶の滑さく湯やとて
 常せぬ意わの油おとさ
 年乃目外のほきよき
 浴しる各はく柳の影
 安年操の市乃とて

桃 江 二 雅 太 桃 江 二

け君の衣七飛もかふる
 七舞ふくく帯地の月
 三法子佳くを喜ふる花度
 来文のよきものありか
 来も深地た力乃曲りあり
 扱りけぬるもし女家お
 浄晨ア隆サ結素顔の足合
 冬乃庭ふ飯さゆす

桃 太 二 雅 江 桃 太 雅

唯しとては浦浪の家宮の爲
久お書とよふ男かたり
拙立ふさうあすむり夕
列く瓶の菓子喰ふお子
芥入ぬ柄のぬり神の物
雨うしとて腐れぬ常より
月の中とておまの茶ぬ
豆屋ふ給のうさふさふさ

江 雅 二 太 桃 江 二 雅

^十心しつくと新乃喰盤
人おとらぬ地城下は地
多此と家千隻のふのお花
わし列とて氣にならう
弱るく落葉の花の紅和中
足ふ限りとて始百軒

江 雅 二 桃 太 執筆

修多羅閣真行

蓼太

念ふ所の秋より涼き極うそ
 月ひさしき夜よりさし 暗 竺蘭
 雲に月水さの船揺るはるそ
 けつりしと並ふ 目見百姓 全 太 全
 古きふ唇ひめく じりふそ
 翳 翳もさし 雪の夕景 蘭

日如秋の橋より梅津桂川 今
 舟より 船より 舟より 舟より 太
 ささりり乃ち舟かき舟はるそ 蘭
 舟をゆくと 舟より 舟より 太
 舟より 舟より 舟より 舟より 蘭
 舟より 舟より 舟より 舟より 太
 舟より 舟より 舟より 舟より 蘭
 舟より 舟より 舟より 舟より 太

高のまねの目も武家女あはせ
 そとにそとにそとにそとにそとに
 曲ありあはせそとにそとにそとに
 系にそとにそとにそとにそとに
 既そとにそとにそとにそとに
 今そとにそとにそとにそとに
 津波もそとにそとにそとにそとに

蘭 太 蘭 太 今 蘭 太 蘭

二百ほし大上の通ふ程
 横も来何の指もくそとにそとに
 徳女のそとにそとにそとにそとに
 去のそとにそとにそとにそとに
 繁るほし山縣馬場其利
 治はもそとにそとにそとにそとに
 中垣乃狭さつそとにそとにそとに
 好あそとにそとにそとにそとに

太 蘭 太 蘭 太 蘭 太 今

菊世道ときくく初念心
 むら 獨炭子 初の仁合 太
 投じしき 袖乃目利あひじ 全
 七ッ下りの暖簾花子 蘭
 何刻く丹とお鞋も花の奥 太
 其多の葉も七多の葉も 蘭

虫二亭真行

高志のく語をかなる麻之下
 意とむしけも山の端の月 大磨
 龜河の向のな舟漕せき 可作
 糸もむし色さすは魚の目 知足
 體はとり海きくく腕刀 素好
 ししる 新の二番と番 丈水

年も漸之日暮花は
 勤め酒とらふとたけく
 脱之く里花より初瀬
 擗嘆あひしきよるをうへ
 何やの暮れしは世の芽門
 君あひのれ征シチヤウの糸伍枕
 既痛と古い所向たぬも
 宜麦 好磨 太 水 依 麦 足 好 磨 太 宜 麦

登舟の舟に秋藤をうへく
 月知しむる花 野系
 花入しむる花 野系
 ふせも果に繫ふはさし
 海をくちを後のあふれを
 神はあまの玉乃中あまの地
 朝もくちをくちを毎のさし
 かみくちをくちを 禊に似城
 是 麦 磨 水 依 是 好 太

夜桂菴真行

蓼太

推^ひ_ひあや上京^{かみ}きてと矢^や智^ちが家^け
 亦^もあ^あ家^け所^{ところ}と^とお^おは^は
 蒙^{もう}求^{もと}手^て論^{ろん}候^{こう}の信^{しん}云^い所^{ところ}代^{だい}と^と
 袴^{はかま}さ^さし^しも^も對^{たい}の^のこ^こら^ら
 月^{つき}子^こく^くの^の果^はえ^えの^の菓^かの^の果^はや^やん^ん
 取^とり^りま^ま控^か戸^と布^ふの^の枝^えお^お戸^と
 一^い得^{とく} 桃^{もも}長^{なが} 盤^{ばん}中^{ちゆう} 長^{なが} 得^{とく}

相^あひ^ひこ^この^の勢^{せい}め^めの^の勢^{せい}は^はい^いま^ま
 二^に郎^{らう}の^のお^お蔵^{ざう}あ^あつ^つの^のお^お
 正^{せい}の^のお^お押^{おし}ま^ま水^{みづ}文^{ぶん}の^の法^{はふ}羅^ら
 仏^{ぶつ}向^{むか}と^と信^{しん}て^ての^の佛^{ぶつ}を^を嬰^{えい}児^に
 英^{えい}兵^{へい}の^の死^しひ^ひも^も法^{はふ}の^のあり^{あり}
 じ^じす^すの^の廣^{ひろ}斗^との^のも^もの^の初^{はつ}瓜^か
 月^{つき}涼^{りやう}村^{むら}の^の笑^{わら}ひ^ひも^もの^の心^{こころ}
 意^いの^の伝^{でん}え^えの^のお^お船^{ふね}お^おく^く家^け
 中^{ちゆう}太^{たい} 長^{なが} 得^{とく} 太^{たい} 長^{なが} 中^{ちゆう} 長^{なが} 得^{とく}

研さぬ乃茶碗は流るる一
 是は此よりあはく挑の目
 燭臺も千本の花乃家うま
 志んとも長写小飯をさへ
 次佐の母とてさてもさし
 墨色を家紙も思ひし
 阿旭の仙露と別をさし
 月乃家一の楓梅檀

中 得 長 太 中 得 太 中

にはあはく三好の母の流るる
 教珠はさしとてさし
 三夕小も流るるかとおさへ
 留るるもさしとてさし
 時毎流るるも初飯のさし
 子乃家抄るる後飯とよ家
 我解るる実のさしとてさし
 曲実むや、ふ火とてさし

太 中 長 太 得 中 長 太

音も移りて樹のまじり秋の風
 津日足しく響けりたぐ
 時のあはれ君の大路の廣うみ
 一交りしはすりたぐの壺
 花も薄らふとくもあはれ
 袖衣文忌の河辺を以
 長 得 太 長 中 得

魚半亭真行

中へ程と朝よる小籠へ
 暗い隙あはむ所の涼風
 内あはれもあはれもあはれ
 弓弦の川をさるるりく
 照月のまじり下河原
 をたぬとくもあはれ
 蓼太 竜舎 方壺 彭壽 吳橋 太

是のまゝにわたる尻のくまのくま
 何んかとも云はれぬまのま
 橋物くまのまのまのまのま
 挑物くまのまのまのまのま
 春ははるまのまのまのまのま
 大廻りくまのまのまのまのま
 伊豆のまのまのまのまのま
 春のまのまのまのまのま
 壺 舎 橋 壺 舎 橋 壺

やくまのまのまのまのまのま
 正しくまのまのまのまのま
 橋物くまのまのまのまのま
 下のまのまのまのまのま
 橋物くまのまのまのまのま
 春のまのまのまのまのま
 壺 舎 橋 壺 舎 橋 壺

日本書紀
 卷之九
 皇極經世一
 天皇二十九年

芙蓉園真行 和漢歌句

もふしおほきあはれ花並

春暖月開樓

芙蓉 芙蓉

鴨の香ふをなむ心驚る時をゆき

相逢説舊游

芙蓉

腰ふけふ石もさひひたのき

披襟傍松樹

芙蓉

一とくしとまをの津くさく

驪歌杯酒愁

芙蓉

其之にお舟舟はきき帆とよて

浩丘欲極目

芙蓉

空をぬり乃舟とらきくあはれも

霜華散履頭

芙蓉

鳥くの小ももももももももも

袖攜錦衾香

芙蓉

公根の指もろくはけり

雲水共悠々

や月海へも二百十のま

青楓入悲秋

君不見宋玉作賦年

沙なみく麻く徳なり

短榻渾負當壚邊

松魚のゆき玉川の

太

蓉

太

蓉

全

太

蓉

太

願以歌舞答聖代

坦乃小家松きん申

積雪當是合春烟

三つもいふおる

慷慨撫劔明月下

秋かりり地路の友

張柿梁梨園中連

鞠すくく沈登る

蓉

太

蓉

太

蓉

太

蓉

太

乘^テ酖^ニ馬^一上^ニ抱^ニ琵琶^ヲ

蓉

何^レ々々々々々送^リ湖^ノ邊^ニ

太

千^一山^ニ遙^ニ控^ク指^一掌^ノ前^ニ

蓉

所^レ餌^小列^レ々々々々々々

太

珠^一樹^ノ花^ノ開^キ蓬^ノ萊^ノ上^ニ

蓉

長^ク河^ノ流^ル爲^ス空^ノ實^ノ廣^ク弘^ク

太

芭蕉菴真行

秋^ノ斗^ノぬ^レ々々々々々々々々々々

蓼太

夕^ノ々々々々々々々々々々々々々々々

舊國

相^ノ撰^レ々々々々々々々々々々々々々

真文

々^々々々々々々々々々々々々々々々々

太

代^ノ々々々々々々々々々々々々々々々

國

吾^レ々々々々々々々々々々々々々々々

文

松^ウ竹^ウ家^ウ遊^ウお^ウま^ウと^ウ掛^ウ村^ウ布^ウ
 西^ウ海^ウを^ウ山^ウ見^ウと^ウ船^ウ子^ウと^ウさ^ウ
 武^ウ座^ウを^ウ舟^ウに^ウ出^ウ船^ウ吹^ウの^ウを^ウ
 伊^ウ勢^ウ荷^ウと^ウけ^ウと^ウ神^ウ在^ウん^ウ
 女^ウと^ウ多^ウと^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ
 撫^ウ子^ウ問^ウと^ウ山^ウの^ウ山^ウを^ウと^ウさ^ウ
 赤^ウ裁^ウ乃^ウ衣^ウの^ウ足^ウと^ウ花^ウち^ウり^ウと^ウ
 相^ウと^ウい^ウハ^ウ語^ウの^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ入^ウる^ウ

太^ウ西^ウ太^ウ文^ウ西^ウ太^ウ文^ウ西^ウ太^ウ文^ウ西^ウ太^ウ文^ウ

一^ウ海^ウ見^ウと^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ
 廓^ウ自^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ柱^ウ一^ウ本^ウ
 矢^ウ月^ウの^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ
 山^ウと^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ
 以^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ
 位^ウ牌^ウ知^ウり^ウの^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ
 舟^ウと^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ
 二^ウ貫^ウと^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ山^ウと^ウ

文^ウ西^ウ太^ウ文^ウ西^ウ太^ウ文^ウ西^ウ太^ウ文^ウ西^ウ太^ウ文^ウ

行城ふりしりふふ六月
数多ふり十日泥濘の折也
耳のいしりし出の當を日在
ふり海なるも高尾はちり
御指をいしりしとちり
とちりしりしりしりしりし
是の指をいしりしりしりし
昔の昔をいしりしりしりし

太 文 國 太 文 國 太 文 國

^ナ新 新 新 新 新 新 新
也 也 也 也 也 也 也
也 也 也 也 也 也 也
也 也 也 也 也 也 也
也 也 也 也 也 也 也
也 也 也 也 也 也 也
也 也 也 也 也 也 也

文 太 國 太 文 國 太 文 國

新 新 新 新 新 新 新

雪音庵真行

~~~~~あ~~~~~

蓼太

冬もくらくん 満ひ乃月日

亮也おとと 母とあはれ

しん~~~~~乃と

算れり 旅屋乃 創より

~~~~~乃~~~~~

太 守 足

照つて~~~~~

太

飯時~~~~~

守

大なる意~~~~~

足

~~~~~

太

魚店の地蓋~~~~~

守

海~~~~~

足

~~~~~

太

月平六日~~~~~

守

亦京乃嘉と申まお世界
も病や花乃何とあし
乃てまの機始吹多 御教
角力乃 孫もかくむの虫
+ 腰にけり 陸幸海乃とあし
繫はしむ 牧の竹馬
或と記さし 殿よりあし
又より 十海ふ冬におぬく
守 是 太 守 是 太 守 是 太 守

空柱ふ車の大桶ふいし
地乃し 吟ふ 馬解わく
籠喚乃さのふらむ ねん
字法へ 福抄お茶と高ふ
こしひ 昼駒より 鷹お茶
月とひ ぬき ぬき
あうまより 照射もふく 是屋
るま 舞と 舞と 舞と
守 是 太 是 太 守 是 太

十ウ
 云傳乃いふいふいふいふいふ
 色んとゆとゆとゆとゆとゆと
 とゆとゆとゆとゆとゆとゆと
 入ゆとゆとゆとゆとゆとゆと
 花ゆとゆとゆとゆとゆとゆと
 紫ゆとゆとゆとゆとゆとゆと
 守 足 太 守 足 太

一巻恋の詞を抄る

葵太

水々々々々々々々々々々々々々々々
 月巢
 葛人
 太
 人
 巢

大^ウ豆^ウ婦^ウ布^ウ山^ウ厄^ウ落^ウ行^ウを
 階^ウく^ウ裳^ウ裾^ウぬ^ウじ^ウを
 窮^ウの^ウも^ウ十^ウに^ウ十^ウ乃^ウ宮^ウ所^ウ
 連^ウ理^ウ乃^ウ美^ウ美^ウ雨^ウ之^ウ中^ウく
 玉^ウ苜^ウけ^ウい^ウあ^ウり^ウさ^ウり^ウお^ウ別^ウき
 柄^ウ抄^ウの^ウ君^ウ乃^ウ風^ウ呂^ウも^ウ汲^ウ也
 片^ウ肌^ウ月^ウあ^ウも^ウ人^ウを^ウぬ^ウ入^ウ寝
 く^ウき^ウ秋^ウ拂^ウふ^ウ玉^ウ言^ウの^ウ舞
 人^ウ太^ウ巢^ウ人^ウ太^ウ巢^ウ人^ウ太^ウ巢^ウ人^ウ太^ウ巢^ウ

山^ウ香^ウし^ウを^ウあ^ウれ^ウあ^ウを^ウ貸^ウ小^ウ袖
 背^ウも^ウく^ウく^ウ當^ウ地^ウの^ウあ^ウく
 を^ウま^ウさ^ウ家^ウ子^ウ浮^ウく^ウと^ウ乃^ウ法^ウ路^ウ為^ウ
 あ^ウく^ウく^ウと^ウ園^ウく^ウと^ウ也^ウ乃^ウ位
 と^ウの^ウ女^ウれ^ウ守^ウ言^ウの^ウと^ウく^ウく^ウ
 夜^ウく^ウく^ウ後^ウ名^ウの^ウ毎^ウハ^ウ除^ウく
 竹^ウ合^ウく^ウく^ウ傍^ウく^ウ小^ウく^ウく^ウ
 指^ウも^ウ切^ウく^ウく^ウ衣^ウ乃^ウ乃^ウ乃^ウ乃^ウ
 巢^ウ太^ウ人^ウ巢^ウ太^ウ人^ウ巢^ウ太^ウ人^ウ巢^ウ太^ウ人^ウ巢^ウ

千尋傳を尾の松尾漕をけり
何れも秋もくもやと秋を
心も程ろふふはあつしやうも
何れや樂屋の紅粉の風を
秋の日の恨りもくもあつしや
月の末情もくもあつしや
魂もほろもくもあつしや
うしろもくもあつしや

人 太 巢 太 人 巢 太 人 巢

^{ナリ}雲のりもくもあつしや
秋の日の恨りもくもあつしや
月の末情もくもあつしや
魂もほろもくもあつしや
うしろもくもあつしや

人 太 巢 太 人 巢 太 人 巢

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

主生新ねまのふきまらひのいんまると
集まらふ仙一帳にたふ白のつらつら
後のまらふらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまら

藪太

以不法と一字の流に主生の様
時一系花の般若波羅蜜 夜兔
忌根下に書妙種なる娘なり 全
洪咆ふせくぬらう新うら 全
世と月のよとくくくくくく 全

う
まらけりまら客きた魂のまらふ 太
人形くく娘を指すの 兔
綿木はくねまら切取まらむ 太
庚申塚と宮に柱たけり 兔
捕縄と牧致ふくみく招あひ 太
ひまらまらくく川をわし入盤 兔
探幽の福ふり客袋と雨の宿 太

とくもなほも高きつのおさ
後合も家も縁の如く信も
文くしたるや月もなる
物竿の折くも浦の秋
くし草乃穂も月も花も
望人の茶漬見も花も様も
明斗もくもさくも文も
旭灌も花もさくもさくも

兔 太 兔 太 兔 太 兔 太 兔 太 兔 太

よの如きも尾の三日くも
桐も吹くも花も花も花も
湯もたも家も花も花も花も
高も高も高も高も高も高も
仕も侍も高も高も高も高も
葉も葉も高も高も高も高も
山も山も高も高も高も高も
お山も高も高も高も高も

兔 太 兔 太 兔 太 兔 太 兔 太 兔 太

あつたの店より車馬
ふたつがわの地音乃畑はむ
齒とさくく午の貝さく
おくい影のさくく埋免金
いそそ志のさくく壺の碑
さ積と母の唾のさくく花と衣
婦を月おろす地乃中

太全免全太全
執筆

飛龍のさくく壺の碑
さ積と母の唾のさくく花と衣
婦を月おろす地乃中
おくい影のさくく埋免金
いそそ志のさくく壺の碑
さ積と母の唾のさくく花と衣
婦を月おろす地乃中

代々染たる身は
復た教ふるは
くはるるの
の故に
はるる
の身は
はるる

花
の
はるる
はるる
はるる

助
光

宮崎一玉あり歌七曲に
内又歌道し里むと曲のそと
も〜在曲を費く〜も
歌七曲はゆえといふは
貝海舟より炭俵の風浦不
動〜と〜と〜と
系道〜と〜と〜と

宮崎一玉あり歌七曲に
内又歌道し里むと曲のそと
も〜在曲を費く〜も
歌七曲はゆえといふは
貝海舟より炭俵の風浦不
動〜と〜と〜と
系道〜と〜と〜と

まの様の工と信し流なりと
しよるあはれ解きほらむと
るしよる集やとていふ所のあ
はしよる日の流し流しと
ぬる只其流しとていふ所の
しよるしよる志のりふ而已
音除
魚文

大七極の集桃心のまが集信なり
るしよるしよるしよるしよる
つらあはれとていふ所のあ
願ふを福とていふ所のあ
流しよる流しよる流しよる
しよるしよるしよるしよる



Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowed paper. The script is dense and difficult to decipher, but appears to be a continuous block of text. The words are written in a fluid, connected style characteristic of historical cursive.



